

40. 権助狐と今川墓地

今川4-29、今川公園の北側にある今川墓地は、元 今在家村の住民の墓地です。

現在は、住宅街の真ん中にこのような墓地がある形になっていますが、昔は北東1kmにある今在家村と、細い1本の農道によって結ばれていた農地ばかりの寂しい場所でありました。

南海平野線 (No. 61) が大正3年(1914年)年4月に、大阪鉄道(現在の近鉄南大阪線、No. 25)が大正12年(1923年)4月に開通して、墓地より西(今川の西)側の農地に住宅建設が盛んとなり、戦後は鳴戸川の東側にも住宅が密集して、現在のような墓地になっています。

昭和初期ではまだ、鳴戸川の東側には住宅がなく、夏休みには、子供達の「肝試しの場」でした。

権助狐のお話は、電鉄開通以前の明治中頃までの昔話です。

今在家村の竹松と言う男が、ホロ酔い気分で通りかかった今川墓地で、若者達が相撲をとっていました。腕自慢の竹松がこれを片っ端から投げ飛ばして、翌日に現地に行くと、沢山のお地藏様が倒されていたというお話です。



権助狐(こんすけきつね)の話
を
聴く
子供達(昭和十五年夏の思い出)

人が、狐や狸に化かされて、「石の地藏と相撲を取る話」や、「道に迷い、とんでもない所を歩いていた話」などが当時語りつがれてきました。

41. 賽(さい)の神社と「とんど行事」

「馬街道」とも呼ばれた下高野街道{四天王寺－田辺－天美－八下(堺市)－狭山}が南北に貫いている矢田の一角に、道祖神があります。

村に疫病が入らぬように、また旅人の安全を祈願して、祀られています。



・とんど行事

昔、近くの川を流れてきた石が、ブクブクと泡を吹いていました。村人が拾い上げると、石が言うには「我は火の神であり、寒いからドンドン火を炊いて欲しい。供養してくれる人には1年間息災のご利益を与える」とのことです。

この伝承は人によって少しずつ異なるものの、矢田聚落ではこの賽の神を、「火除けと家内安全の神様」として大切にしています。

毎年1月15日が「とんどの日」で、火の中に差し入れた「書き初め」が高く燃え上がる程、学校の成績が上がるとの古老の話が伝わっています。

戦前の「とんど行事」は大和川のほとりで、1月14日の夜から15日の明け方まで、徹夜で行われていましたが、現在では「賽の神の石」は通常祠の中に納められ、とんど焼きの際に持ち出して火に掛け、とんど焼きが済めば、その石に晒し布を巻き付け、酒をかけて、元に納める神事が続けられています。

「この御利益で戦争中にこの地域に爆弾が落とされなかった」と信じられて、現在も灯明が絶えず、この信仰が継続しているとのことです。

42. 酒君塚古墳

東住吉区東部にある鷹合・桑津・山坂の一带には、かつて大きな古墳群があったことが、江戸時代の地籍図や古墳にまつわる伝承などから推定されています。

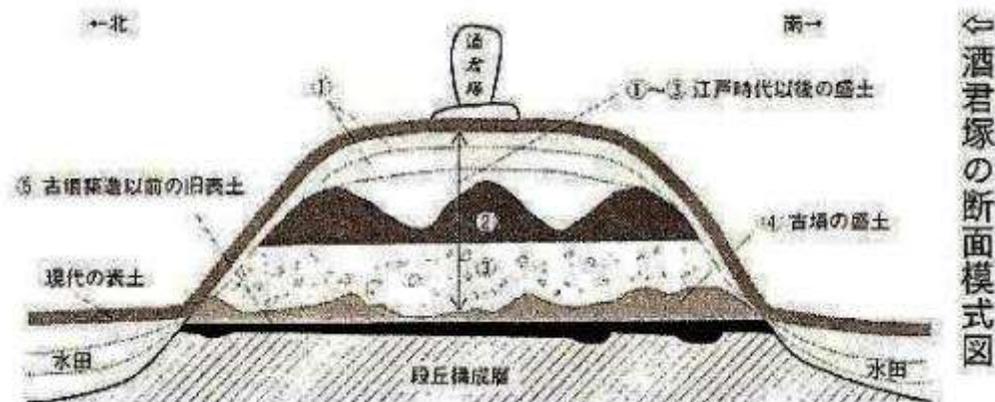
駒川上流右岸にある鷹合の酒君（さけきみ）塚古墳は、近年の発掘調査によって、現在の墳丘の盛土下に、かつて平塚と呼ばれた長径35m以上、高さ2m前後の古墳の墳丘が確認されました。

さらに、出土した円筒埴輪から築造時期は四世紀末で、田辺古墳群では最も古い古墳であることも明らかになりました。

酒君塚古墳（平塚）は、御勝山古墳に次ぐクラスの平野川に至る駒川・今川水系の首長墓であり、田辺古墳群の被葬者の頂点に立った倭王権とも関わりの深い人物であったとされています。

酒君については「日本書紀」の仁徳天皇四三年の条に、「依網屯倉阿弭古（よさみのみやけあびこ）が、不思議な鳥を捕まえて天皇にさしあげたところ、天皇はその鳥が鷹であることを知られ、百濟王の一族である酒君に命じて鷹を養わせた。」とあります。

「大阪遺跡」大阪市文化財協会編（創元社）には、下記の図があります。



「大阪遺跡」大阪市文化財協会編（創元社）から

43. 下高野街道

律令制度の崩壊によって、天皇家が奉祭する神道（しんとう）が衰退し、熊野詣がすたれると共に大衆仏教が興隆し、真言宗総本山の高野詣が京都の天皇や公家ばかりでなく武士や庶民にまで広がりました。そこで、京都方面より大阪を通り高野山に行くには、淀川を舟で下って大坂（堺、天満、平野）に上陸し、その後下記に3つの陸路での高野道が伝わっています。また京都から陸路のみで高野山に詣でる道として東高野街道があり、都合4つの高野街道があるのですが、その呼び名や認識に混乱があるようで、下記に整理します。

さらにこの街道は、大阪（天王寺、平野）や堺と、松原や狭山との間の村々を結ぶ生活道路としても発達したので、この街道はかなり曲がりくねっており、長距離の街道となったものと推察されます。

○ 高野街道について

高野街道は狭山と高野山を結ぶ街道ですが、長野で東と西の高野街道に分かれ、さらに西高野街道は狭山より北に3つの街道に分かれており、それぞれは堺に向かって西高野街道、天王寺に向かって下高野街道、平野に向かって中高野街道（上高野街道）と呼ばれています。

大阪から高野山に詣でる3街道（登り方向に表示）

1. 西高野街道

堺旧市街から東進し、中百舌鳥、初芝、北野田、山本、岩室、今熊（狭山池西南・亀ノ甲付近）、茱萸木（クミノキ）（※）とほぼ国道310号線に併行しており、北西から南東へと抜ける道です。平安末期から高野山詣での街道として、室町から江戸時代には旧堺港から高野山への貨物輸送で賑わった街道とされています。

（次ページへ続く）



東住吉100物語

※ 茱萸木(クミノキ)

正しくは「グミノキ」ですが、鎌倉時代の太政官記録ではこの地名を久美丘(クミオカ)としていたので、古伝承を尊重して大阪狭山市の昭和45年(1970年)の議会で、「クミノキ」を正式な町名とされました。

2. 下高野街道

天王寺(大道)から矢田地区の中央を通り、下高野橋で大和川を渡って南下します。

堺市北野田を経て、狭山の池尻から、池の西側である池之原を通り、今熊で西高野街道と合流します。

3. 中高野街道(旧称「上高野街道」)

平野(杭全神社西の泥堂口)から南進し、瓜破を経て大和川の高野大橋(江戸中期まで橋がなかった)を渡り、阿保の茶屋では、堺東を東に向かう長尾街道と交差し、岡で竹之内街道と交差し、東野(菅生神社付近)を南下し、狭山池尻から、池の東側を南進し、半田をほぼ北から南に縦断して、茱萸木で西高野街道と合流します。

京都から陸路のみで高野山に詣でる街道

東高野街道(京都から生駒山系の麓に沿って北麓から西麓を辿るコースです)

八幡(京都府八幡市)→洞ヶ峠→河内国田口村(大阪府枚方市)→郡津村(交野市)→中野村(四條畷市)→豊浦村(東大阪市)→楽音寺村(八尾市)→安堂村(柏原市)→国府村(藤井寺市)→誉田村(羽曳野市)→富田林村(富田林市)→長野村(河内長野市)、ここで西高野街道に合流します。

○ 東住吉区内の下高野街道について

寺田町駅西側あたりで奈良街道から分岐する場所を基点とし南下、JR環状線、JR関西線、国道25号線(天王寺駅方面)と交差し、JR阪和線沿いに美章園駅にいたりますが、ここから東南へ約100メートルは消滅しています。しかし、榎神社の東で復活し北田辺小学校東側を通過、松虫通をこえて東西に走る庚申街道と交差します。その後、南下をつづけ現田辺一丁目の大念寺と安楽寺の間を抜け、南田辺村(現田辺一～四丁目)に入る。南田辺本通商店街を抜け山坂神社の鳥居を右に見ながら東へ折れ長居公園東筋を前に南へ湾曲しながら南港通りへ至ります。ただしこの間は区画整理により消滅しています。

旧街道は南港通りの駒川あたりに出て、その後矢田二丁目で道筋が復活し、南進して大和川に至ります。その後、下高野大橋を越え、矢田七丁目に鎮座する阿麻美許曾神社(No.3)の東を通過して松原市に入り、狭山に至ります。

明治20年代(1887年～1896年)に当時の田邊村、矢田村の有志が道の普請をしたことが記録に残されています。矢田5丁目には「下高野街道土木竣工」の碑が残されています。

東住吉区内では、北田辺、旧中野村、矢田地区には、現在でも往時の雰囲気が残されており、歴史のロマンに浸ることができる街道です。

44. 磯齒津(しはつ)路

長居公園通にほぼ沿っていた街道で、住吉区の浜口町付近に上陸した外国使節がこの街道を東進し、奈良に向かったものと考えられています。

日本書紀の雄略天皇紀に書かれている内容では、「雄略8年(464年)2月条に青(アオ)と博徳(ハカトコ)が呉国(※1)に出使し、雄略10年(466年)9月条に筑紫に帰国したが、雄略12年(468年)4月条に再度派遣され、雄略14年(470年)正月条に帰国し、呉の使いと共に機織の技術者を連れて、住吉の津に上陸し、そこに泊った。この月に呉の来朝者のため道を造って、磯齒津路を開通させて、これを呉坂(クレサカ)(※2)と名づけた。」と記載されています。

「しはつ」は磯果、磯齒津、四極等と万葉集にも出てくる地名です。



※1 呉国(222年～280年)と雄略天皇紀

宋書の倭王武(雄略天皇)の上奏文、稻荷山鉄剣文字、古事記等の記録から、雄略天皇の在位期間は458年～489年と推定されるので、日本書紀の編者が雄略天皇の時期を約150年誤算して、宋の時代であるべきを、呉の時代としています。

同様に、魏志倭人伝に登場する卑弥呼(?～248年)を神功皇后の時代(好太王碑391年前後)に当てていますので、やはり150年位の誤差があるようです。

崇神天皇の没年では、住吉神代紀により258年と証明されていますが、日本書紀はBC29年と記載されており、290年の誤差があります。

神武天皇が実在とすれば、約660年の誤差と言われているので、日本書紀の年代を時期により、660年(神武)から0年(推古)の修正をして読み替えると、中国や韓国との史実と一致するとも考えられます。

※2 呉坂(通説は住吉区、東住吉区との説もある)

現在の長居公園通は、長吉長原から浜口町までは、ほぼ平坦な道路で、坂と見られる場所はありませんが、湯里住吉神社や中臣須牟地神社の伝承を繋ぎ合わせると、西除天道川と長居公園通の交差点付近に天神山と呼ばれる小高い丘があったようです。

これが、磯齒津路の呉坂と呼ばれた由来ではないかとも考えられています。

45. 常栄寺

(1) 須牟地(住道)廃寺の塔礎石

住道矢田4(矢田中より西へ230m 矢田東小より南へ150m)の聚落の真中にある真宗大谷派の寺院で、境内の雨受けに利用されている石が、寺から北東310mにある須牟地廃寺の塔礎石として有名です。

(2) 矢田小学校の発祥地

常栄寺は矢田小学校の発祥地として、大阪市の小学校教育史上有名です。明治6年(1873年)2月にこの寺の本堂を教室として開校し、前身は「河州第33番小学校」と名付けられ、後に元円生病院があった住道矢田1-6付近に、住道小学校として新築されるまで3年間続けられました。明治政府は明治5年(1872年)に新しく小学校の教育制度を公布し、「不就学者をなくすこと、教育を受けられない不幸な人を無くすこと」としましたが、当時のこの村の就学率は43%で、これでも全国平均の32.3%よりも高かったそうです。

(3) 寺の開基等の由緒

第18代住職の久世照護氏によれば、信長と石山本願寺との合戦に際して、この地域では、松原市我堂と長居公園付近に掘割を築き、一向宗門徒の砦となり、この辺りも激戦場となったと言われています。この寺は合戦の翌年天正9年(1581年)に浄土真宗の寺院として開基しましたが、徳川家康の政策により、本願寺が東西2派に分裂した時(1602年)に、教如(※)が率いる東本願寺に属しました。

※ 本願寺の歴史と教如の動き

親鸞の末娘覚信尼(カクシンニ)が文永9年(1272年)、親鸞の遺骨を京都東山大谷に建て、「大谷御影堂」と称したのが浄土真宗の興りです。

その後、親鸞の曾孫・覚如(カクニョ)がこれを「本願寺」と称し、第3世教祖と自称しました。室町時代の第8世蓮如(レンニョ)の熱心な布教活動と末寺や門徒を巧妙に組織化し、大きく発展したが、武士の政治権力と対立する迄(一向一揆)に至りました。

第11世の顕如(ケンニョ)は織田信長と熾烈な戦いを展開し、いわゆる石山本願寺戦争は10年間も続きましたが、信長の死後の豊臣秀吉は本願寺に対し融和政策を採りました。しかし、大衆の寄進で富みを築き、軍備を保有し(信長に最後まで楯突いた)長男・教如や、焼き物の鑑定で巨万の富を築く千利休に対して、秀吉は警戒していました。

(西本願寺の興り)

天正19年(1591年)秀吉は利休を自害させたが、顕如には京都堀川の土地を寄進し、これが現在の西本願寺となります。しかし、その翌年に顕如が死去して、教如が12世を継ぐと、秀吉は顕如を追放し、三男の准如(ジュンニョ)を12世とさせます。

ところが慶長5年(1600年)の「関が原合戦」に勝利した家康が政治の実権を握ると、慶長7年(1602年)に教如に烏丸七条の寺領を与え、これが現在の東本願寺となり、巨大な浄土真宗門徒は東と西に分裂し、対立します。

これは巨大化する本願寺門徒の分断を意図した家康の策謀で、東西本願寺派寺院が隣接する例が多のは、その狙いがあったのこともいえます。



46. 神馬塚



住吉大社は、壱岐・対馬や北九州を発祥地とする航海の神様です。菅田別皇子(ホンダツツケノミコ:応神天皇)のご生誕にも関わり、神功皇后の軍事政策の成功から、その直系の王朝である仲哀-応神-仁徳-履中の4代は、河内に巨大な古墳を築き、道路や堤および港湾の建設を実行しました。国勢が飛躍的な進歩を遂げたことに伴って、住吉大社も大阪(摂津国)に進出し、民間の信仰も相まって社運は隆盛を極め、奈良時代には多くの広大な社有地を保有していたようです。

そのような次第で、神事をつかさどる神馬(白馬:アオウマ)も神功皇后の時代から、大和王朝の寄進があったようで、文献的には白河上皇の寄進が確認されています。

その後は皇室の威信が武士(将軍)に替わり、頼朝の寄進が確認されています。また、神馬の飼育は土師氏が神功皇后の軍政に功があった経緯から、当田辺の基礎を築いた同族の田辺氏とその子孫が相伝して、担当していました。

しかし、江戸時代の住吉信仰はむしろ民間により支えられ、神馬の寄進は当時財力が旺盛であった木炭の協同組合によって、維持されていたようです。

なお、神馬の飼育や没後の管理は伝統的に田辺郷の住人に任せられ、その厩舎は「性應寺」の北東隅と、「北田辺郵便局」の北隣にあったとされますが、現在その地は共に駐車場になっています。

飼育は北と南にそれぞれ3名の舎人(トネリ)が任命されていたが、男子系の一子相伝のために、次第にその後継者が減少し、明治の末期には橘忠三郎一家のみとなっていました。

神馬の遺骨(たてがみ)は山坂1-11にある「うどんやかぜ一夜本舗」の西側、JR阪和線に沿った一角に、末廣氏によつて丁重に現在も祀られています。

東住吉100物語

47. 住道(須牟地)廃寺跡



矢田中学校から北西部 30m に藤原不比等 (659 年～720 年) が建立し、僧玄昉 (ゲンボウ) が開基したと伝える寺跡があります。

平安末期の兵火 (源平合戦か) にかかり焼失したと言われる大きな寺院で、古瓦や塔芯石が確認されています。

中臣須牟地神社と共に、初期の中臣氏 (藤原氏) との関わりの深さが推察できます。寺跡に大きな塚が立っており、寺が兵火で焼けた際の灰を集めたら、この塚になったと言われていました。

石の塔芯礎が、ここより南西 310m にある常栄寺の雨受けに転用されていますが、寺院規模や伽藍配置は確認されていません。

芯礎石の大きさは底辺 167cm、高さ 150cm の正三角錐台。芯礎石の中央にある柱穴の直径は 67cm、深さは 16cm のようですが、手水鉢に加工した際に、より深くえぐったようで、寺内の説明板には赤く描いて舍利骨の穴がえぐり取られ跡を示しています。

石の材質と加工の状態から奈良時代に造られたものと判定される上に、石に焼けた跡が見られるので、須牟地寺の塔礎石と判定されています。



48. 鷹合神社

鷹合神社は、当初、鷹飼堂と呼ばれ、祭神は午頭天主でした。

明治5年（1872年）村社の資格を与えられ、地名にちなんで鷹合神社と改められました。住吉神社の旧神官青蓮寺という家の記録の中に、延徳元年（1489年）8月云々、鷹合の祭り云々とあるので、創祀はその以前と考えられます。

境内にある「楠の古木」は、昭和55年（1980年）10月大阪市条例により「保存樹木」としての指定を受けました。

神社東南角の房本宅内に、鏡池という池があります。ある日、酒君（No.4、酒君塚古墳の項参照）が鷹の行方を見失い、各地を探しあぐねこの池のそばで思案にくれていたところ、かたわらの椎の大樹にとまる鷹の姿が水面にうつり、喜んでとらえたという伝説があります。



「鷹合」という地名については「日本書紀」仁徳天皇四三年秋九月条に「依網屯倉阿弭古（よさみのみやけあびこ）が網を張っていると、見たこともない異鳥がかかり、天皇に献上した。天皇は酒君を呼んで尋ねると、これは百済に多い鷹という鳥で、百済では鷹で小鳥を捕らえる遊びが流行していますと答えた。

じゃあお前が飼って慣らせと命じられ、酒君は『おしかわのあしお』というものを脚に、尾に鈴をつけ、訓練して再び帝に差出す。帝は大いに喜び百舌野で狩猟され、多くの雉を捕らえる。これはすばらしい鳥だ、もっと増やそうと鷹甘邑と呼んだ」との内容があります。

49. 田辺小学校グラウンド

平成17年（2005年）より、大阪市の取組みとして田辺小学校において芝生化モデル事業が開始されました。スポーツ活動の活性化や学校の緑化、ヒートアイランド現象の緩和に役立っています。学校・地域・PTA・各種団体が協働して「芝生」を大切に守り育てています。以降、大阪市内では、このような取組みが進められています。



50. 田辺大根

5～6世紀の古墳時代における上町台地の東側(河内平野)はまだ塩分を含む内海湖でしたが、次第に海岸線が後退し、淡水湖となり、大和川や淀川が運ぶ土砂の堆積によって、次第に野菜耕作に適した砂質土壌が形成されました。

特に江戸中期には大和川の付替工事により、河内平野が広大な干拓農地となり、野菜や木綿の生産地となったのです。

また、大坂は米の集散地として栄え、諸商業が発達したので、食文化も高度化し、所謂食通の人々が増加し、国内外の各地から種々の食材が持込まれ、独特の味を有する農産物が産出されるようになりました。

天保7年(1836年)の「新改正摂津国名所旧跡細見大絵図」によると、胡瓜は毛馬、大根は守口や田辺、蕪は天王寺、茄子は鳥飼や新家、まくわ瓜と人参は木津、白瓜は玉造と黒門および木津、くわいは吹田等々と各地に独特の野菜が産出されていました。

明治、大正、昭和と食生活の洋風化し、食生活に季節性が失われ、生産効率や虫害対策、味よりも生産性(低価格)や外形(味に無関係な美形)を重視する消費者嗜好の変化から、これら伝統野菜は品種改良(雑種交配)された新しい品種に駆逐されてしまい、市場から姿を消しました。

しかし、一部の好事家や農家の自家用に伝統野菜の種が残されていたので、この見直し(割高であるが、美味しいくて、無農薬—安全性)を喚起し、零細農家でも採算が合うことにより、農業活性化を意図したプロジェクトに育てようとしています。

田辺では田辺大根の種子が長居地区の農家に伝えられ、普及活動が盛んになり、地域の住民や小学校・幼稚園・保育所などにより栽培されて復活しています。

実際に大根下ろしに利用すると、一般の大根より、ピリッと辛みがあり、ミネラルも豊富とあります。

これは外見が貧相な大根であるが、その分だけ味やミネラル成分が濃厚となっており、その理屈が簡単に理解できます。

実際に自作してその味合いを経験すると、止められなくなるとのことでした。

